

三浦ヒロの体育指導法の理論的背景に関する一考察

— 垣内松三・芦田恵之助の影響を中心にして —

長 尾 芳 枝 (愛知教育大学非常勤講師)

野々宮 徹 (愛知教育大学)

A Study on the Theoretical Background of

Hiro Miura's Method of Guidance in Physical Education

— based on the influence of Matsuzo Kaito and Enosuke Ashida —

Yoshie NAGAO

Toru NONOMIYA

I 研究の目的

三浦ヒロ(明治31年～)は、大正から昭和にかけての代表的な女性体育指導者の一人である。三浦は、東京女子高等師範学校文科を卒業後同附属小学校訓導となった。その後二年間女子体育研究のため文部省の在外研究員として欧州に留学した。帰国後は東京女子高等師範学校、青山学院高等女学校で体操を教えた。その体育指導の理論と実践は、教師による伝達や鍛練の傾向を強くしていた当時の伝統的な体育指導に対して批判的であり、児童・生徒を学習の主体として取り組ませる新しい体育指導の創出に苦闘したところに特色があるといえる。本研究は、このような三浦の体育指導の理論がどのようなところから形成されてきているのか、すなわち三浦の体育指導法の理論に大きな影響を与えたといわれている垣内松三や芦田恵之助らの思想が、どのような形で反映されているかを究明することを目的としている。

II 分析の視角

三浦の体育指導に当時国語教育界における中心人物であった垣内松三・芦田恵之助の国語教育の理論が影響を与えたことは、すでに国枝タカ子らの先行研究¹⁾によっても明らかである。しかし、

具体的な影響は明確にされていない。本研究は、改めて垣内・芦田と三浦の関わりを見つめ直し、垣内の①形象理論、②綴り方の教育、③板書機構の活用や芦田の①共流の思想、②劣等児の指導、③綴り方(随意選題)による教育、④真情流露の教育、⑤「自己を読む」教材解釈の方法、のような国語教育の理論ないし思想が三浦の体育指導にどのように影響を与えたのかを具体的に検討しようとするものである。これによって、三浦の体育指導の理論の特徴や意義が一層明確にされるものと期待する。

III 垣内松三・芦田恵之助と三浦ヒロの関わり

三浦は、東京女子高等師範学校一年生の時にはじめて垣内の国語の講義を受けた。当時をふり返って三浦は次のように述べている。「……(略)……今は、読書の眼をあけて頂いたのはあの講義であったこと、どの一時間でも真実なゆるみのない真剣な態度でお稽古に立たれる垣内先生のお姿は、その当時の一つの異彩と感じたこと、そして自分の教師としての態度もそうありたいとなんとも思ったことを永久に思い出すことが出来るのみだ。先生の作文の時には、文はまことを以て書かなければならないものであるということを心から教えられた。」²⁾ 三浦は自分が将来かくあるべきという

教師像を垣内から学びとっていたといえよう。また作文を書く姿勢を三浦は学んだ。三浦は垣内と出会ったことにより後に生涯「師」と仰ぐことになる芦田恵之助を知ることになる。それは垣内が東京女子高等師範学校の学生たちに、東京高等師範学校附属小学校の訓導であった芦田の授業を見るように勧めたことがきっかけとなった。三浦は芦田の講習会が夏休みにちょうど彼女の郷里である北海道岩見沢町で行なわれることを知りはじめ芦田の講習を受ける。³⁾ それ以来三浦は教職についてからも芦田に生涯「師」として教えを乞うことになる。その頃のことについて三浦は次のように回想している。「女高師の二年の秋から卒業まで、私は芦田先生によってあらゆる場合に『まことのわざ』というものが、どの様に尊いものであるかを教えて頂いたのだ。それはどれも先生と生徒さん達とのお稽古の姿からであった。その後（卒業後のこと…筆者）^{注1} 私は一学期に二度ぐら

馳せ参じたりしたことも何度あったかしれない。」⁴⁾

三浦は、将来自分は国語教師になるものとして学生時代をすごし卒業後は東京女子高等師範学校附属小学校の訓導になる。しかし、三浦の体育指導が注目されたためであろうか、女子体育の研究の為に海外留学を命ぜられる。^{注2} 三浦は、体育の道に進むことについて非常に悩み芦田に相談をした。そこで芦田の「三浦さん、教育の道は一つでね」⁵⁾ という言葉に勇気づけられ、体育の道に進む決心をしたのである。また、次で詳しく述べることになる昭和10年の東京女子高等師範学校退職の件についても、三浦は芦田に相談に行っている。このことについては芦田が次のように書いている。「…（前略）……17日（昭和10年4月17日のこと…筆者）には三浦さんに訪はれて大難に処するの覚悟をきき、若い身空でと敬服したことでした。」⁶⁾ これ以後の三浦は、芦田の思想を体育に生かそうと努力している。

以上のようなことから、垣内・芦田と三浦の関わりの深さがうかがえることと思う。

付加しておくが、垣内と芦田はともにお互いを師と呼びあう関係にあったといわれている。⁷⁾ 次の表は、垣内・芦田・三浦の略歴を関連させながらまとめたものである。⁸⁾

垣内松三・芦田恵之助・三浦ヒロの略歴

垣内松三(1878～1952)	芦田恵之助(1873～1951)	三浦ヒロ(1898～)
1878(M11) 岐阜県高山市に生まれる。	(M6) 兵庫県氷上郡に生まれる。 高等小学校卒業後17才で簡易小学校授業生として教職につく。 (M29) 夏季教育講習会の講師として来た樋口勘治郎に師事。 (M31) 京都府教育会募集の懸賞文に「尋常小学校作文教授方案」12枚が当選する。 (M32) 東京高師附属小学校准訓導 (M33) 国学院大学選科生	(M31) 北海道札幌市に生まれる。

〔垣 内〕		〔芦 田〕		〔三 浦〕
<p>1903(M36)</p> <p>東京帝国大学文科卒業 大学院入学 (国文学専攻)</p> <p>1910(M43)</p> <p>東京帝国大学講師 東洋大学講師 東京女子高等師範学校講師 「有職故実」「国文学研究 法」を講じる。</p>		<p>(M34)</p> <p>姫路中学校助教諭</p> <p>(M38)</p> <p>東京高師附属小学校訓導に なる。(このころ随意選題 を初めて試み綴り方教授研 究へと取り組んでいく。)</p>		
<p>1912(M45)</p> <p>東京女高師教授</p> <p>1918(T 7)</p> <p>同校退職</p> <p>1919(T 8)</p> <p>8 月欧米に出張 3 月に帰国</p> <p>1920(T 9)</p> <p>東京高等師範学校講師</p>		<p>(T 1)</p> <p>岡田虎二郎について静座修 行する。</p> <p>(T 2) 「綴り方教授」</p>		<p>(T 5)</p> <p>東京女子高等師範学校文科 入学。</p> <p>☆A 垣内の講義を受ける。 ☆B 芦田に初めて会う。</p> <p>(T 9)</p> <p>同校卒業。附属小学校訓導 となる。</p> <p>☆C (T 9)～(T11) 学期に 二度ずつぐらい芦田のとこ ろへいく。</p>

垣内は、教育実習の担当となり
学生に東京高師附属小学校の芦田
の授業を見るように勧めた。

〔垣 内〕		〔芦 田〕		〔三 浦〕
<p>1922(T 11)</p> <p>「国語の力」センテンス・メソッドを提唱</p>		<p>(T 10)</p> <p>東京高師附属小学校退官 朝鮮に赴任</p> <p>(T 14) 「第二読み方教授」</p> <p>全国教壇行脚を始める。</p>		<p>(T 12)</p> <p>☆D 芦田の「教育の道は一つ」という言葉に勇気づけられ体育の道に進む決心をする。文部省在外研究員として、ヨーロッパ留学（体操研究のため）～(T 15) 帰国</p> <p>(T 15)</p> <p>東京女子高等師範学校に奉職。「欧州の体育を見て」</p>
<p>1927(S 2)</p> <p>「国語教授の批判と内省」</p> <p>1929(S 4)</p> <p>東京文理大学講師をかねる。</p>				<p>(S 3) 「子どもの遊び」</p> <p>(S 5) 「行進遊戯」</p> <p>(S 7)</p> <p>丸子小学校で実践 「小学校における行進遊戯材料と其の指導法」(上・下)</p>
<p>1932(S 7)</p>		<p>(S 7)</p> <p>芦田は東京府下、千駄ヶ谷小学校において、「乃木大将の幼年時代」の授業を垣内に見せ、青山広志の速記によって「垣内先生の御指導を仰ぐ記」として世に出した。それ以来垣内・芦田の二人が師弟という形で国語教育界に影響を分担し始めた。</p>		
<p>1933(S 8)</p> <p>「小学国語読本、形象と理解」</p>		<p>(S 9) 「風鈴」</p>		<p>(S 10)</p> <p>☆E 芦田に決心を伝える。 東京女子高等師範学校退職 青山学院女子部講師となる。</p>
<p>1936(S 11)</p> <p>「国語教育講話」</p>		<p>(S 11) 「国語教育易行道」</p>		<p>(S 11)</p> <p>同校体育科専任となる。 「女子体育より見たる行進遊戯」 「女性体育とダンス」</p>

〔垣 内〕		〔芦 田〕		〔三 浦〕
1937(S12) 「言語文化体系」		(S12) 「静座と教育」		(S12) 「女学校の唱歌遊戯・行進 遊戯」
1938(S13) 「形象論序説」		(S13) 「教式と教壇」		(S13) 「真実の体育を求めて」
1940(S15) 「国語形象性を語る」				(S16) 聖心女子学院初等科主事と なる。 青山学院退職
1942(S17) 東京高等師範学校退職				(S17) 聖心女子学院退職
				(S18) 「女教師の手記」
				(S22) 静岡市長田南中学校教諭と なる。
				(S23) 「低学年の体育指導」
		(S25) 「恵雨自伝」		
		(S26) 死去 78才		(S30) 同校退職，地域の人々に対 する教育的な奉仕活動を継 続
1952(S27) 死去 74才				(S54) 「四十二本の矢」 (S62) 静岡市在住

Ⅳ 垣内松三・芦田恵之助の国語教育理論の影響

昭和10年以前の三浦の体育指導に際しての基本的考え方は、芦田の共流思想の影響および綴り方教育の方法の影響を受けているのがみられるが実際の指導場面における垣内・芦田の国語教育の方法論的な影響が多くみられるようになるのは、昭和10年以後のことである。このことについて三浦は、「昭和10年という年は、私の一生の中でいって一番著しい思想的飛躍のあらわれた時期だといってもよいと思います。」⁹⁾と述べ「まだ四十まへの年齢で、一生の中などと断言することは余り軽率すぎるかとも考えますが、それを敢て言い得る程鮮やかな躍進があったように思います。……(略)

……私が体操教師としてどの道を如何に歩んでゆけばよいかということ、具体的な仕事の上に、はっきりと結びつけて考えることが出来るようになったのは、昭和10年以後のことです。それから今日までまだ二年しかたっておりませんが、私にとってはこの僅か二ケ年の年月が、それ以前にも増して有益であったと思っています。」¹⁰⁾と、転機となった昭和10年のことについてふれている。この年は、三浦が長年勤めていた東京女子高等師範学校をある理由で退職した年であり、いわば要目を守るという義務から解放された年であるといえよう。

この時期三浦は、人間完成のための体育指導をめざし、そうした教育では、女性にはダンス教材

が最も適しているものと考えたのである。そして国語教育から学んだことを体育に積極的に取り入れようとした。それは、次の記述からもうかがうことができる。「私はこの頃になって、先生（芦田）の教育の御精神が国語教育の易行道を招来して、全国多数の児童・生徒・並びに其の教師を救済し、向上させるということを伺ったことから、更に先生の国語教育易行道は、そのまま体育易行道にも通ずるということを私の体育教壇で実証することが出来るという確信を持つことが出来るようになりました。」¹¹⁾

なお、垣内・芦田と三浦との影響関係については、垣内が東京女子高等師範学校の教授の時の学生が三浦であり、芦田は当時東京高等師範学校附属小学校の訓導という立場にあった。三浦は垣内から授業を通して教えを受けたことはもちろんであるが、後の芦田に教えを乞うたように、直接疑問や課題を投げかけ、指導を受けるというような接し方ではなかった。それゆえ、授業以外の三浦と垣内との関係は書物等を通じて、あるいは芦田を通じての影響関係であったようである。つまり、垣内・芦田の師弟関係と、卒業後の芦田・三浦の師弟関係という形で三者が結びついていてよいであろう。

(1) 垣内の影響

① 形象理論（センテンス・メソッドを含む）

形象理論とは、芸術的構造としての形象（表現されてあるもののかたち・すがた）の内面的構造を解明しようとする理論である。従って文章表現を切り離された一語一句と見るのではなく、全一的・総合的な「文の相」として認識し、文章表現の解釈にあたっては、意味の全一表現としてのセンテンスに重点が置かれている。¹²⁾この垣内の全体的な形象をとらえるという形象理論は、三浦の行進遊戯材料（その中の「美的感情を内容とするもの」）の指導に取り入れられている。すなわち、部分の動作よりも、作品の流れの意味を重視して作品の指導をしたところにみられる。

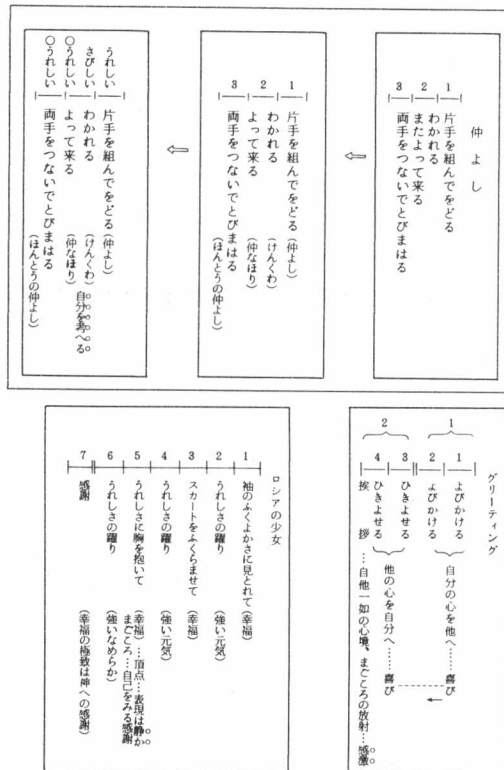
② 綴り方の教育

垣内は、綴り方を指導する場合、形式と内容、

言表と対象、ことばと心をつなぐ形象作用を重視する考え方に立っている。¹³⁾「そのまま」、「ありのまま」でなく、「あるがまま」に直観の完全な表現をめざし、展開の過程における想の流れ、内面構成のはたらきに注目し、できあがった作品の論評よりも無言の記述作業を重視している。三浦はこの綴り方を体育授業に応用し、児童・生徒の授業に対する感想を綴り方に表わさせ、彼らの心の動きを知って自分の指導を考えていった。

③ 板書機構

板書機構とは、垣内の形象理論から出たものであろう。それは、問答法の学習により教師がポイントを黒板に書きとめて全体がわかる（のこる）方法のことである。¹⁴⁾三浦は、体育指導に黒板を活用し、話し合いにより教材の全体像を板書でとらえさせた。次に掲げた表は、行進遊戯材料「仲よし」を授業でとりあげた際に黒板に書いたものである。右から左へと話し合いにより内容をふくらませ、ポイントを黒板に書きとめていっていることがわかる。¹⁵⁾「グリーティング」、「ロシアの少女」についても同様である。¹⁶⁾



(2) 芦田の影響

① 共流の思想

芦田の場合、国語教育の技術としてよりもその根底にある教育思想として重要なのが共流の思想である。共流の思想とは、「教師は児童を教育することによって、自己を向上させるのです。児童は教師に導かれて向上の一路を辿るのです。師弟の間に置かれる材料は共に研究し、鑑賞し、批評することによって双方発達の機縁となり、師弟相共に触れる環境の一切は、師弟共に自然の大法を仰いで自己究明の道にいそしむの教授がなければなりません。」¹⁷⁾と芦田が述べているように、教師と児童・生徒が互いに育ち育てられて向上の一路をたどるものである。三浦は、この芦田の共流の思想を受けて次のように述べている。「…(略) ……同行者としての敬愛、それに結ばれたまことに安らかな両者の関係が成立いたします。この関係においては、たとえ教師が欠点を持っていたとしてもこれを糊塗する必要は断じてありません。又、不完全なものを完全らしく粧う苦心もいらぬのです。生徒もただありのままを教師の前にひろげて、共に向上の一路に精進すればいいのです。これほど安らかな生活が果たして他にあるでしょうか。一切の自己欺まんを捨てて唯ひたすらに真実の道を求めて歩むばかりです。しかも、この両者は常に純情に於いて融合することが出来ますので、生徒の願いは教師の願いであり、生徒の喜びは教師の喜びであると共に、教師の喜びとするもの、教師の願いとするものも亦、生徒に十分に理解せられるのであります。」¹⁸⁾三浦の思想の根底には、脈々とこの共流思想が流れていたのである。それはまた、児童の姿をとらえる際にも、次のような暖かな見方がその底にあったからであろう。

芦田は昭和10年に著した「国語教育易行道」で児童について、次のように語っている「生きたる児童は求める心が強く、それがいかなる事にも完全を目指しているのが面白いと思います。児童が心身ともにすくすくと伸びるのはこれが為だろうと思います。」¹⁹⁾と、そして「児童は心に触れる所、響く所があれば、最善を尽くすものですが、触れないこと響かないことを強いられると、半醒半睡

のような目をして、ひたすら終の鈴の救いをまつような諦めをさえしめします。」²⁰⁾と、芦田が国語教育を通してとらえた児童観を語っている。それは、教師のおしつけではなく、児童・生徒自身の自発的な活動の展開によって人間形成を図るにもかかわらず、しかし児童中心主義でもないというところの考え方である。この考え方が三浦の場合にも基本的に受け入れられているといえよう。

② 劣等児の指導

芦田は、教育の出発点を劣等児の指導においている。そして劣等児は教師がつくり出しているという反省を投げかけている。芦田はその著書の中で、次のように劣等児と彼との関わりを述べている。「私が教壇に立つと、何処でも劣等児がよく動くといつて下さいます。それは私が幼い時劣等生であったがために、劣等児の直観に快感を覚えて、『我が友来たり、意を強うするに足る。』と歓迎するのかもしれませんが。しかし、天賦は劣等児ならざるもの、それが教室の学習に於いてのみ常に出来ない出来ないといわれて、すっかり気を腐らせている者があります。それが私によって平等に見られるのです。そこに嬉しさを感じるのではないかと思います。今日こそ殊勲をたててという子供らしい名誉心なども加わって、活動するのではないかと思います。」²¹⁾芦田は、人間は差別の目で見るから優中劣が生じ、劣を中に、中を優にしようとする「難行道」も生じると言っている。もちろん平等の目でみても優中劣はあるけれども、ただ一途に育とうと努力するところを尊いものと見ること、そしてそこを見るとき、いかなるものに対しても心の底から愛する心も沸き敬する心も生ずる、それが人を育てる道であると明言している。²²⁾

三浦は、この芦田の考えを体育指導に生かしている。その様子を三浦は「劣等児を救いえた喜び」として「真実の体育を求めて」に書いている。²³⁾

③ 綴り方(随意選題)による教育

芦田は、文章とは真剣な態度を以て、作者の人生観のひらめきを、自己の言葉を以て表現したもので、己れを向上進歩せしめるための人間共通の本能に基づいたものである。¹⁸⁾という文章観をもっている。そして随意選題の方法で自己の体

験をふりかえり内省する綴り方を提唱している。

三浦は芦田が主唱した随意選題のような考え方で自分の体育指導についての感想文を児童・生徒に書かせ、それによって彼らの内面をとらえ、これを自分の指導法の評価・改善に利用した。

④ 真情流露

これは、芦田が説いたものであるが生き方の問題であり、教育の技術をこえたものである。三浦は、体育指導の時間に時期をみて、児童・生徒に練習過程において心を込めた学習をすることの尊さを語りかけている。たとえばそれは、^{注3}「皆さんが六年になってから先生には皆ぐんぐん伸びているのがよくわかるようになりました。これは皆さんの本当のねうちがあらわれるようになったからです。その代わりえらい子供とあまりえらい子供も、はっきりと区別がつくようになりました。いま跳躍のおけいこをして貰っていて、先生には其の事がよくわかったのです。心をひきしめて自分の道に断然すすむことの出来る人は、必ず成功します。私はいつもいいます。先生がダンスの上手だというのは形ではありません。形は第二です。第一は心です。自分のつとめとしてよこんで一生懸命にやるその気持ちが尊いのです。第一なのです。一生懸命しなくてもよく出来る人もあります。その人はたしかに幸福者です。けれどえらい人ではありません。一生懸命しても上手でない人もあります。その人は不幸です。けれど生命がけで熱心にできる人は偉人です。形のかげにかくれた気持ちを見なければなりません。幸福は逃げてしまう時があります。しかし、えらさは永久にかわりません。皆さんはこの道理をよくお考えなさい。そして、えらくなってほしいのです。」²⁴⁾

⑤ 「自己を読む」教材解釈の方法

芦田は、「自己を読む」教材解釈について次のように述べている。「……(略)……私は教壇に立つて『自己を読む』ということはこうすることだ、これを覚えなさいということではなくて、私はこれを読んで、私の心にこう響きますが、お前さん方の真心にはどう響きますかね、という位のところが『自己を読む』或いは自己を読みますという意義だ、位のところで私は進んで見ようと考えて居るのであります。」²⁵⁾

三浦は、芦田の提唱した「自己を読む」教材解釈の方法を体育に応用し、教材解釈は、つまるところ、自己を読むことだとした。彼女はこれを行進遊戯作品の鑑賞の際に結びつけてとらえ、次のように述べている。「私達が行進遊戯材料を以て被教育者を體育せんとするには、その材料の外面に表れた形式即ち身體運動を、まづ最初の手懸りとして、之を理解せしめ、その理解を通して最後に、形式の内面にひそんでいる作品の生命いいかえれば、創作者がその作品の内容としたところのものの中に、純観照的態度に於いて、参入せしめることを必要とするのであります。即ち正しい意味の鑑賞を指導することなしに、真の體育は企圖することが出来ないのです。」²⁶⁾このように三浦はその指導に「自己を読む」という教材の内面化をはかっていった。次に掲げるのは、行進遊戯材料の中でも美的感情を内容とした作品①「仲よし」、②「グリーティング」③「ロシアの少女」の内容吟味の際、三浦が解釈したことがらである。

① 「仲よし」

人生とは常に波瀾と曲折の絶え間もない連続であり、よろこびとかなしみによって糾はれた生活であるが、このかなしみの中にはっきり自己をみるものは、決してかなしみを不幸として終らせるものでない。本当の幸福を発掘することの出来るものは、我が心の力である。²⁷⁾

② 「グリーティング」

「挨拶」という人生生活の一部に内包せられる人間への愛²⁸⁾

③ 「ロシアの少女」

心の素直な人は、あらゆる所に幸福を見出し感謝をもつ。²⁹⁾

V まとめ

三浦の体育指導法の理論的背景として、垣内松三・芦田恵之助の影響を遂一取り上げて検討した。その結果次のことが明確にされたと思う。

1. 三浦の指導は、従来指摘されている以上に垣内・芦田の国語教育の思想及び理論の影響が大きい。ただこの場合、すでに三者の関係で述べたように、三浦は垣内の指導を授業以外では直接的に受けていないこともあり、直接的には、芦田の

影響の方が大きかったとみられる。

2. 国語教育の理論・技術の影響を受け、その実際の指導の方法を体育の場に応用したということは、「身体教育」の性格を強く持つ当時の体育指導に対して、三浦の指導は主体的な体育学習を進めようとしたものであり、それは結局、日本の学校体育の指導の内面化をめざしたものであったとして大きな意義を持つものであったといえよう。

注

1. 学生時代は、授業の休みとなる夏など年に1回くらいしか芦田先生の講習会には参加できなかったということである（三浦先生談）
2. 東京女子高等師範学校文科出身の三浦先生が大正12年、12名の文部省在外研究生中ただ1名の女性として、しかも体育研究の為に留学を命ぜられたことは大変興味深いことである。誰がどのような形で三浦先生を推薦したかは、今後は是非とも明らかにしたいところである。三浦先生の授業の様子を見ていたであろう推薦者は、三浦先生の教える姿に、次代の体育界を担うべき新しい姿を見い出したと考えられるからである。
3. 常時接していた生徒達にはこれほど細かに説明することはなく、先生の意図は一言二言で伝えられたといわれる。

主な引用・参考文献

- 1) 国枝タカ子「ダンスによる児童中心主義の実践 — 三浦ヒロ —」女性体育史研究会編『近代日本女性体育史』日本体育社、1981
- 西村絢子「わが国における近代女子体育の受容と変容 — 明治・大正期における女子体育留学生（井口あくり、二階堂トクヨ、三浦ヒロ）の業績をめぐって —」日本女子体育大学紀要、1979、第4巻
- 高橋美栄子「昭和初期における我が国の学校ダンスに関する考察 — 三浦ヒロのダンス論を中心に —」北海道教育大学紀要、1967、第二部C
- 安村清美「芸術教育と舞踊教育 — 三浦ヒロの思想と実践 —」舞踊学7号、1983など。

- 2) 三浦ヒロ「真実の体育を求めて」同志同行社、1938、P23～P24
- 3) 三浦ヒロ 同上 P26
- 4) 三浦ヒロ 同上 P27～P28
- 5) 三浦ヒロ 同上 自序
- 6) 芦田恵之助「国語教育易行道」同志同行社、1935、P230
- 7) 高森邦明「近代国語教育史」鳩の森書房1979
- 8) 「垣内先生還暦記念会編」文学社、1938
「芦田恵之助研究3」明治図書、1983
「近代日本女性体育史」日本体育社、1981
「近代日本教育の記録中」文唱堂、1978
など
- 9) 三浦ヒロ 前掲書2) P213
- 10) 三浦ヒロ 前掲書2) P213～P214
- 11) 三浦ヒロ 前掲書2) 自序
- 12) 高森邦明 前掲書7) P226～P231
- 13) 飛田多喜雄「国語科教育方法論大系10」明治図書、1984、P158
- 14) 奥水実「国語科の基本的指導過程入門」明治図書、1985
- 15) 三浦ヒロ「現代学校体育全集、女子中等学校篇第5巻、唱歌遊戯・行進遊戯」1937、P183
- 16) 三浦ヒロ 同上 P191～P193
- 17) 芦田恵之助「第二読み方教授」芦田書店、1925、P22
- 18) 三浦ヒロ「女性体育とダンス」東洋図書、1936、P153～P154
- 19) 芦田恵之助 前掲書6) P44
- 20) 芦田恵之助 前掲書6) P45
- 21) 芦田恵之助 前掲書6) P48
- 22) 芦田恵之助 前掲書6) P48
- 23) 三浦ヒロ 前掲書2) P183～P189
- 24) 三浦ヒロ 前掲書2) P188
- 25) 芦田恵之助「風鈴」同志同行社、1934、P127～P129
- 26) 三浦ヒロ 前掲書15) P148
- 27) 三浦ヒロ 前掲書15) P183
- 28) 三浦ヒロ 前掲書15) P190
- 29) 三浦ヒロ 前掲書15) P192